

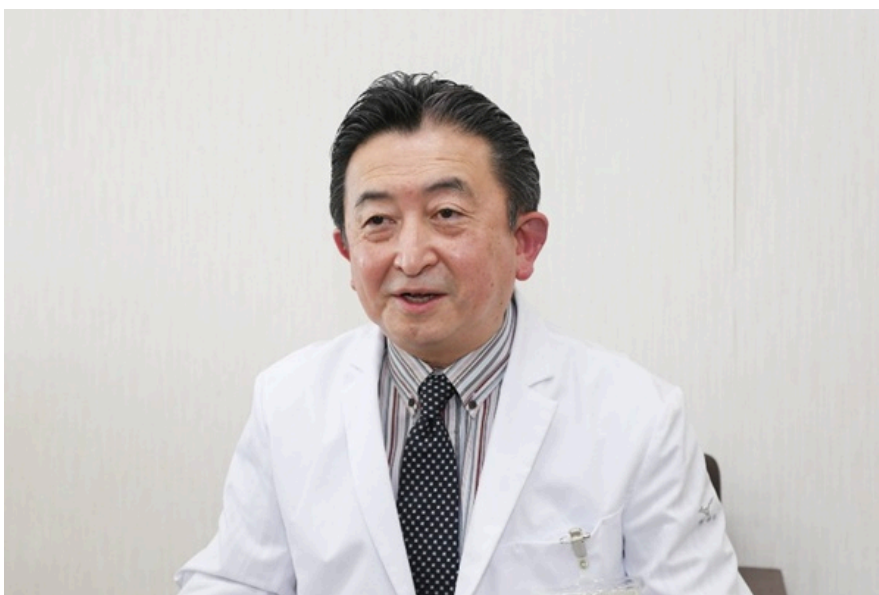
## 【石川】「血液・リウマチ膠原病科での診療は総合診療」全身診られる医師育成-正木康史・金沢医科大学病院リウマチセンター部長に聞く ◆Vol.2

シェーグレン病のメッカ、患者会と連携し啓発も

2025年12月24日（水）配信 m3.com地域版

複数の診療科が連携して膠原病患者を診療する金沢医科大学病院（石川県内灘町）リウマチセンター。センターの拠点となる血液・リウマチ膠原病科はシェーグレン病の臨床研究のメッカとして知られ、IgG4関連疾患の診療に強みを持つ。「当科の診療はまさしく総合診療」というマインドで複数の専門家がカンファレンスを行っていた文化をセンターの運営にも生かしたい考えだ。正木康史部長に、病診連携や地域での啓発活動も交えて聞いた。（2025年11月13日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



正木康史氏（病院提供）

### シェーグレン研究で著名な故・菅井進氏が在籍、正木氏も師事

——リウマチセンターでは正木先生が部長を、血液・リウマチ膠原病科臨床教授の川野充弘先生が副部長を担います。診療における強みをお聞かせください。

リウマチセンターの拠点となる血液・リウマチ膠原病科は、シェーグレン病における臨床研究のメッカとして知られています。というのも、この病気の研究のパイオニアである故・菅井進先生が当院で長く診療と研究に携わってきた歴史があるためで、私も過去、菅井先生に師事してきました。菅井先生は日本シェーグレン病学会の祖であるシェーグレン症候群研究会を設立され、初代の代表世話人をお務めになりました。患者組織であるNPO法人シェーグレンの会・日本シェーグレン症候群患者の会の立ち上げにも尽力されました。こうした背景から、金沢市では毎年患者会イベントが開かれています。

先に紹介したIgG4関連疾患の診療にも強みがあります。菅井先生や私が以前から診療に携わっていたほか、2024年に金沢大学から来られた川野先生は膠原病の診療・研究において著名な先生であり、IgG4関連疾患では厚生労働省の研究班の班長も務めていました。この領域の診療においては全国的にも質の高いものを提供できていると考えています。膠原病は種類が多岐にわたるため、膠原病全体においても他院で診断・治療の難しい患者さんをお引き受けするなどして、さまざまな方の力になりたいです。

## 医師不足地域で勉強会、患者会と連携し公開講座

——リウマチセンターは院内連携だけでなく、地域に向けて病診連携も進めていくといいます。

先ほど話した通り、石川県の膠原病診療において能登地区や加賀地区には専門医がほとんどいないため、これらの地域で定期的に勉強会を開いて病診連携を進めたいと考えています。例えば、関節リウマチの治療では現在、効果的な薬が複数ある一方、副作用のリスクなど注意すべきこともあります。勉強会を通して開業医の先生方に理解を深めていただき、日常診療は地域の内科や整形外科などに担っていただき、当センターでは数カ月に1回診療する形を築くことができれば、地域にお住まいの患者さんの安心感を高められ、受診負担を軽減できるのではないかと考えています。

その点では既に、センターが開設した8月に能登地区の先生方15人ほどを対象に勉強会を開きました。定例化し、加賀地区などにも広げていく計画です。

——報道によると、市民に向けた啓発活動も行っていくそうですね。

複数の患者会と連携し、市民公開講座を定期開催していく予定です。その初回として9月、リウマチ友の会とタイアップして関節リウマチの治療の現状をテーマに講演しました。関節リウマチの講座は年に1回のペースで行っていきたいと考えています。初回の参加者は主に北陸3県からだったと思いますが、リウマチ友の会は全国規模の患者会なので、啓発活動を推進していくことで、より広域からの参加も見込まれると思います。

このほか、2026年9月に開かれる日本シェーグレン病学会の当番会長を私が担当するため、それに合わせて患者さん向けの講座も開く予定です。全身性エリテマトーデスについても、市民公開講座を開くべく準備しています。

——センターが開設されて3カ月が経ちます。見えてきた課題はありますか。

開設前から続くものですが、人員不足は課題ですね。センターとして何らかの将来的な展望を描いたとしても、マンパワーが不足しているとスムーズに進みづらいでしょう。血液・リウマチ膠原病科には10数人の医師が在籍していますが、さらなる増員を図るべく院内外でリクルートに取り組んでいます。院内の研修医や本学の卒業生に声をかけているほか、膠原病の診療を得意とする医療機関と提携して人材交流ができないかと相談しています。

人材育成としては、膠原病の診療に特化した医師を増やしたいと考えています。当科では血液疾患と膠原病の両方を診ていますが、中でも血液疾患の診療は医師の負担が大きいという現実もあります。二つの病気を診られる特性を生かしつつ、より膠原病を得意とする医師を育てることにより、役割分担が図りやすい組織構造にしたい思いがあります。

## 総合内科の知識を得やすい組織風土を生かす

——多くの診療科と連携するセンターの特徴が、医師の育成にもプラスに働きそうです。

そうですね。当院ではセンター開設前から複数の専門家がカンファレンスに参加しているので、総合内科的な知識を得やすいと言えるでしょう。血液疾患と膠原病のほか、先に紹介した川野先生をはじめ腎臓専門医の資格を保有する先生も数人参加するため、腎臓内科の知識も得られます。さらに、総合内科や糖尿病・内分泌内科、循環器専門医の先生もカンファレンスに参加しているため、医師としての視野はより広がりやすいと思います。

当院では2023年に総合内科が開設されましたが、こちらで科長を務める水田秀一教授は元々、血液・リウマチ膠原病科に在籍していた先生です。「血液・リウマチ膠原病科の診療はまさしく総合診療だ」——。私たちはこうした価値観を胸に難症例に向き合ってきました。その上で、リウマチセンターでは外科や眼科、歯科口腔科などの先生とディスカッションする機会も増えていくと思われるので、患者さんの全身を総合的に診たい医師を育成しやすい環境を提供できるのではないのでしょうか。

血液・リウマチ膠原病科の特徴でいうと、IgG4関連疾患やTAFRO症候群、多中心性Castleman領域の方がたくさん紹介されて集まってくるため、これらの病気の診療に関心のある人はぜひ医局に来ていただけたらうれしく思います。

——最後に、今までご紹介いただいたこと以外にセンターの展望として描いていることがあればお聞かせください。

将来的には医師だけでなく、多職種の育成も担っていきたいと考えています。看護師や薬剤師、リハビリスタッフにもカンファレンスに参加していただき、患者さんの日常生活の支援も行っていきたい。日本リウマチ財団が認定するリウマチケア看護師や登録薬剤師の資格取得をサポートする構想もあります。

センターの役割としては診療や教育だけでなく、研究にも注力したい思いがあります。そのための具体策の一つとして考えているのが、患者さんのデータベース構築です。金沢市や石川県、あるいは北陸3県において膠原病患者さんの病気の種類と患者数の規模感が分かれば臨床研究を推進していきやすくなりますし、また新薬の治験などを行う際にも貢献しやすくなると思います。基盤のしっかりとした研究体制をつくることも今後のテーマの一つです。

◆正木 康史（まさき・やすふみ）氏

1989年金沢医科大学卒。金沢医科大学病院で研修を受けた後、1991年に同大血液免疫内科学教室に入局。米国留学を経て1999年同大講師、2007年同大臨床准教授、2015年から同大教授。2025年8月から同院リウマチセンター部長を兼任する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

